

**Text of our statement at ceremony to plant saplings donated by GLH to UNHQ,
NY, May 5 2025**

本日、グリーン・レガシー・ヒロシマ (GLH) の日本および世界40か国以上の仲間を代表して、ここに立てることを光栄に思います。

この柿の苗木がたどってきた長い旅路、そしてその旅を可能にした方々について、少しお話をさせていただきます。

この苗の“母木”は、爆心地から530メートルに位置する愛宕池で被爆しました。奇跡的にその命をつなぎ、生き延びたのです。

復活したその姿に、広島の人々は大きな力を得ました。その木は、爆心地から半径2キロ以内で生き残った約160本の「被爆樹木」として、特別な存在とされています。

2011年、当時UNITARに在籍していたナスリーン・アジミさんと、ANT-Hiroshimaの渡部朋子さんという二人の女性が、被爆樹木の種とそのメッセージを世界に届けようと力を合わせ、「グリーン・レガシー・ヒロシマ」を立ち上げました。

この思いに共感したUNITARをはじめ、数多くの組織や個人が無償で支援に加わり、やがてそれは国際的な運動へと発展していきました。

この苗木の種は、樹木医の堀口さんの指導のもと、GLHチームが丁寧に採取し、広島市植物公園に保管されました。その後、私たちの地域拠点であるサンディエゴ植物園へ送られ、現地の専門家によって大切に育てられました。

今年の初春、そのうちの2本が竹の筒に包まれ、ニューヨークへの旅に出たのです。国連本部の受け入れチームは、ここ数週間、苗木を細心の注意を払って見守ってくれました。

そのすべてのおかげで、私たちは今ここに集まり、未来の世代へ緑の遺産を手渡す機会を持つことができました。

朋子さんはいつも、「被爆樹木は、声なき声で私たちに語りかけてくる」と言います。

そしてナスリーンさんは、「GLHは1000年続く取り組み。長く意義あることを成すには、地域と人々の力が必要だ」と言います。

皆さんがこの“コミュニティ”の一員となってくださったことに、心から感謝いたします。